「人間疎外」についての若干のノート

清水多吉

始めに

一九三二年にいたって始めて印刷にふされたマルクスの「経済学・哲学手稿」(註1)(Karl Marx/Friedrich Engels; Kleine Ökonomische Schriften 42 Bd., 1955. Die Heilige Familie und andere philosophische Frühschriften 41 Bd. Dietz Verlag 1953)はマルクーゼがいみじくも予言したようにマルクス主義研究史上決定的に重要なモメントとなった。(註2)

それから三十年にわたる論争史はマルクス主義哲学のみならず実存主義哲学者にも大きな関心を呼びおこし、今日におよんでいる。更にいうならばこの論争は哲学の分野をこえて関連諸学問、政治学、経済学、社会心理学、教育学などの領域にも問題提起をしてきている。

これら一連の論争をつらぬく中心テーマは「労働」Arbeit,「疎外」Entäußerung, Entfremdung,「類的存在」Gattungswesen などの諸カテゴリーがはたして歴史学、経済学、社会学などに方法論として介入する内的必然性を

もつかどうか、又それらは単なる人間学の存在論的カテゴリーにすぎないものなのかどうか、という点にある。

この小論に於ては「疎外論」論争の素描を試みつつ、一八四四年—四六年に於ける「疎外論」が現代にいかなる意義をもつものなのか最後に私見を述べてみたい。

一

まず始めに「経済学・哲学手稿」の刊行以来、マルクス主義哲学及びマルクス解釈におこった論争を図式的に表示してみるなら次のようになろうか。

Ⓐ「資本論」に定式化された諸概念から初期の文献を検討し、少くとも「経・哲手稿」に於ける諸カテゴリーはヘーゲル的思考法、ないしてフォイエルバッハ的概念の残存であり、それらの止揚によって始めて弁証法的唯物論ないし「科学的」な社会主義が成立したのである。——とする立場。この立場にも多少の見解の幅があるにせよ、総じて「経・哲手稿」と「ドイチェ・イデオロギー」との間に思考方法の断絶ないし止揚、従来の哲学的カテゴリーの破棄があったとする。従って「疎外論」のマルクスに於ける位置は否定され、ないしは消極的評価しかうけていない。この立場では弁証法は人間の主体から独立して存在する客観的自然の客観的運動法則とみなされ、思考の弁証法は自然的なものの一部としてみなされるか、自然の客観的弁証法の反映としてみなされるかである。つまりエンゲルスの「自然の弁証法」的解釈による所謂正統的うけとめ方。最近の例としては „Deutsche Zeitschrift für Philosophie“ 紙上に於て一連の論争をおこした(註3)オットー・グロップ、オットー・モルフ。フランスではアンリー・ルフェーブルとの論争で常に問題になるR・ガロディ。

Ⓑ初期の文献、特に「経・哲手稿」に述べられている疎外概念を中心モチーフとして、疎外の活動とその成果を歴

史的に把握したものが「ドイチエ・イデオロギー」であり、「資本論」をもこのモチーフを中心として検討しなおし、疎外化された私的所有制度（即ち資本主義社会）の分析とみなすもの。この立場もかなりの幅をもつが、G・ルカーチにみるように初期のヘーゲルをも労働の概念をもって解釈し、労働の概念と疎外の概念とを精神現象学成立過程の重要なモメントとする立場もある。ルカーチによると初期マルクスはかようなヘーゲルを比類なき「高い水準」[註4]で哲学と経済学との結びつけをしたことになる。又初期マルクスの文献を完成期のものからかなり独立的にとりあつかい、初期マルクス特に「経・哲手稿」にみられる人間学を、エンゲルス「自然の弁証法」の正統的解釈に対するアンチ・テーゼとしようとすると立場もある。これらの立場は多くの場合修正主義としてⒶの立場からは非難されているが、その非難が哲学論争としてではなく常に政治論として出されているきらいがあるのは残念なことである。[註5]

Ⓒ初期マルクスの文献からマルクスに於ける存在論的諸特徴を指摘し、完成期の弁証法的唯物論や、経済学的諸分析とは全然関係なくとりあげる立場。この場合、完成期のマルクス全体を、この存在論的特徴・直観的価値観を背後にひめている故に「科学」Wissenschaft として成立しえない。――と否定しさるか、存在論的特徴を実存主義的立場から高く評価してⒷの立場に近ずくか、これも又幅広い論争がくりかえされている。ジークフリート・ランツフート、H・マルクーゼなどによって三十年代初期になされた諸研究がこの傾向の原型となった。[註6] これら諸論争のむずかしさは単に文献学的論争、方法論論争、主体性論争としてなされているばかりでなく、きはめてダイナミックな現代政治の諸条件と交差しあっていることである。従ってこれらの諸傾向はすでにそれぞれの思考方法・価値的把握にのっとって初期マルクスの文献をあつかっており、そのことは好むと好まざるとに拘らずそれぞれの帰結を先取りしている。

二

かような論争の発端となる「疎外」はしからばマルクス自身に於てはどのように説かれ、どのように経済学的分析への橋渡しとなっているのか。以上表示した諸論争とのからみあいに必要なかぎりでの彼の論述をとりあげ、以上の諸論争にひそむ問題点を更に展開させる為の手がかりとしてみたい。

「経・哲手稿」の数ヵ所に於てマルクスは人間と自然との関係について次のごとく述べている。

「しかしながら社会主義的人間にとっては、いわゆる世界史全体が、人間的労働による人間の産出、人間にとっての自然の主成よりほかのなにものでもないであるから、彼は自分自身による自分の出生、自分の発生過程についての直観的なあらそえない証明をもっているわけである。(註7)」

「ある存在がおのれの自然をおのれの外にもっていないとするなら、それはなんら自然的な存在ではなく、自然の存在に分かちあずからない。おのれの外になんらの対象をもっていない存在は、なんら対象的な存在ではない。自身が第三の存在にとって対象ではないところの存在は、いかなる存在をもおのれの対象にもっていない。すなわち対象的にふるまわない。それの存在はなんらの対象的な存在ではない。非対象的な本質とは一つの化物にすぎない。(註8)」

「しかしまた、抽象的にとられた自然それ自身だけ、人間から切り離されて固定された自然は人間にとっては無である。(註9)」

この世界史全体が人間的労働による人間の産出、人間にとっての自然の生成に他ならず、ある存在（人間）がおのれの外になんらの対象をもっていない存在（人間）は、なんらの対象的な存在（人間）ではない。人間から独立した自然は人間にとっては無である。――とまで主張するマルクスの思想的背景には脈々とドイツ観念論の遺産が横って

いる。

カントから始まってフィヒテ、シェリング、ヘーゲルを貫く観念論の主題は、主観と客観、悟性と感性、思性と存在の統一の試みであった。カントは人間認識の構造を直観形式と悟性形式とに分かち、感覚を通しての素材をこの形式を介して受けとめ、「私が考える」という先験的統覚によって統一体としての認識がなり立つとした。従って感覚を通しての素材たりえないところのものへの人間悟性の適用を拒否し、これを「物自体」とした。この「物自体」が認識論的性格のものであるのか、存在論的性格のものであるのかについては後年改めて問題になってくるが、カントに続くドイツ観念論は存在論的うけとめ方をしてゆく。そこに残された問題は人間と自然との統一であり、思惟と存在との統一の問題であった。

かような問題意識を受けとめたヘーゲルにとって、「真理とはかかる再興される同一又は他在のうちから自分自身への『還帰』(反省)に外ならないのであって、根源的なる統一又は無媒介の統一そのものではない。真理は己れ自身となる過程であり、終りを目的として予め定立して始めとなし、そうしてただ実現と終りとによってのみ現実的であるところの円周である。(註10)」

つまりヘーゲルに於て存在とは、そのもののうちに多かれ少なかれ実体(精神—絶対理念)の種々の状態を包含し、この実体がおのれ自身を否定することによって自己対象化をなしてゆく過程の諸段階にほかならない。かくて最後に実体がこれら自己対象化した他在を止揚して自己のものにすることにより実体がおのれ自身の生誕地に帰る。ヘーゲルのかような弁証法によって、実体がすべての存在を支配し統括する方式が呈示され、カントが残した二元論は克服されることになる。

ヘーゲルに於けるこの実体のおのれ自身の否定—対象化、これは「労働する意識」という媒介を経て自立的なる存

在を自分自身として直観することを意味する。

もっとも「精神現象学」成立に関する「労働」概念の位置を高く評価すること、それによって初期マルクスの「疎外された労働」の意義を連続的に並べることは多少の異論がないわけではない。いずれにしても「労働」概念はかようにきわめて哲学的カテゴリーであり、単なる経済行為、ないしは経済学的基礎カテゴリーと解されてはならないだろう。

さてここで人間と自然との関係についてのべたマルクスの見解にもどろう。精神現象学をヘーゲル哲学の真の生誕地であり秘密であるとして高く評価しつつも、次の二点で批判を加える。

「哲学者は自分を—つまりそれ自身疎外された人間の抽象的なすがたを—疎外された世界の尺度として立てる。したがって外化の歴史全体と外化の取り戻し全体が抽象的すなわち絶対的な思考、論理学的な思考の生産史にほかならない。(註11)」

つまりヘーゲルに於ける疎外は抽象的な意識として現われるだけであり、人間はただ自己意識としてあっかわれているにすぎない点が一つ。

もう一つのヘーゲル批判は

「彼は労働を人間の本質として、それ自身の実を示しつつある本質として把握する。彼は労働の肯定的側面だけを見て、その否定的側面を見ない。(註12)」

ここで批判されているのは、外化されたもの対象化されたものを精神の一つのあり方とし、外化されたすがたのまま精神的世界を確認し、真のあり方の一つとするヘーゲルの一側面である。マルクスにあっては対象化されてあるもの、外化されてあるものが疎外化されてあるのであり、それ故にこそこれら疎外化された対象的な世界を人間にと

って返還請求せねばならないという自己還帰の論理構造が生れてくるのである。

ヘーゲル弁証法に於ては「労働する意識」というおのれを否定する意識によって自立的な対象を我がものとする面と、その意識によって対象化された存在も一つの真なるあり方であるとする面とが混在している。後者の面はやがて宗教・国家にたいするヘーゲルの「和解」の道を指し示すであろう。

マルクスはヘーゲルに於けるこの二面性を鋭く指摘しヘーゲルに於ける前者の要素をうけつぐ。

「ヘーゲルが人間の自己産出を一つの過程としてとらえ、対象化を対象性剥奪として、外化として、およびこの外化の止揚としてとらえるということ、したがって彼が労働の本質をとらえ、対象的な人間を、現実的なるがゆえに真なる人間を、人間自身の労働の成果として理解する。」(註13)

ヘーゲルに対するマルクスの二つの批判はかようなものであったが、第一の批判、つまり人間本質を自己意識に於てしかとらえないヘーゲルに対してとったマルクスの批判はきわめてフォイエルバッハ的である。「経・哲手稿」に於てマルクスはフォイエルバッハのヘーゲル批判を次の三点に要約する。

一、ヘーゲルは実体の疎外から始めていること。

二、無限なものを止揚し、現実的な感性的なものを定立していること。

三、肯定的なものを再び止揚し抽象を、無限なものをもとどおりに立ちなおらせていること。(註14)

フォイエルバッハが批判するこのヘーゲルの三点をマルクスはフォイエルバッハとともに否定する。従って「経・哲手稿」に於ける疎外のテーマは市民社会に於ける疎外の問題ではあったが、そこにえがかれた人間の存在論的規定はフォイエルバッハ的自然的人間の要素が濃い。次の節に於て考察するところであるが、疎外論にまつわる人間の存在論的規定は多かれ少なかれ抽象性を脱しえない。それを私見によって別な規定をしてみたいと思うが、この傾向は

後の「フォイエルバッハに関するテーゼン」にみられるような社会的諸関係の総和[註15]と人間的本質をとらえてみても同じことである。社会的諸関係の総和とは規定しえないものに対して名ずける総称でしかありえないだろう。

いずれにせよこの時のマルクスにとってはフォイエルバッハによってヘーゲル的実体が人間的なものにひきおろされ、そのひきおろされたフォイエルバッハ的人間を疎外された労働を中心とするヘーゲル弁証法をもって論理ずけることが同時代のポレーミックに対する課題であった。

従ってこの章の始にかかげた一見きはめて主観主義的なマルクスの見解も、現実的な人間的生活を人間の所有として返還請求することのパラドクシカルな表現と解すべきである。それをマルクスは、おのれ自身から始めるヒューマニズム、又は実践的ヒューマニズムの生成ともよんでいる。[註16]

三

背後に豊かなドイツ観念論の遺産を持ち、ヘーゲルとフォイエルバッハの直接的媒介によって得られたマルクスの疎外論も次の点から検討してみる必要がある。

ヘーゲル弁証法の担い手、主体は成果としてはじめて生成する理性（精神）であった。それに相当するマルクスの場合は何んであったろうか。これまで述べて来たようにきはめてフォイエルバッハ的な人間をマルクスは語る。この人間の労働が分業と私的所有のもとにおいては疎外された状態におかれているという場合、疎外されない本来の人間、主体としての人間が問はれねばならない。マルクスはそれを類的存在、人間的本質、全体的人間、全体的個人・類的性格などという言葉でよんだ。

マルクスは自然を人間の労働によって産み出されたもの、人間に対して存在するものに関してのみ自然を認めた。

しかし分業と私的所有下に於ける「疎外された労働」は人間からこの自然を疎外してしまうというとき、類はあらゆる自然を人間のもとにもっている状態のことを意味する。

ここに於て、私的所有は「疎外された労働」の概念から分析によって生ずることを認めつつも、類的存在はきはめてフォイエルバッハ的な概念であることを否定するわけにはゆかない。つまり疎外化の状況分析が市民社会のものであることを認めつつも、その本来の人間存在の規定はきはめてユートピヤ的であることである。

「それゆえ、疎外された労働は人間から彼の生産の対象を奪い取ることによって、それは人間から彼の類的生活を、彼の現実的な類的対象を奪い取るのであって、動物にたいする人間の長所を、彼の非有機的身体たる自然が彼から取り去られるという短所に転化する。(註17)」

この類的存在については、「経・哲手稿」より、より実証的な「ドイチェ・イデオロギー」に於てさえ具体的な記述はみられない。ここに於ては「疎外された労働」に変って「分業」(Teilung der Arbeit) が論理展開の鍵になっているが、この分業によって各人が一定の専属の活動範囲にかぎられてしまうとして、類的存在にあたる記述は次のように述べられている。

「これに対して共産主義社会では、各人が一定の専属の活動範囲をもたずにどんな任意の部門においても修業をつむことができ、社会が全般の生産を規制する。そしてまさにそれゆえにこそ私はまったく気のむくままに今日はこれをし、明日はあれをし、朝には狩りをし、午後には魚をとり、夕には家畜を飼い、食後には批判をすることができるようになり、しかも猟師や漁夫や牧人または批判家になることはない。(註18)」

少壮ヘーゲル派、特にB・バウワーなどに対するきはめてポレーミッシュなものであるこの記述をそのまつにうけとめるわけにはいかないが、少くとも「疎外された労働」の意味は本来動物と区別されるべき人間の意識的実践的な

活動をうばってしまうことにあった。その点「ドイチェ・イデオロギー」の鍵である「分業」も「経・哲手稿」にもられた同一の視点から追求される。

そもそも「分業」の発生は「協働」を予想する。ところが「分業」と「協働」が本来自由意志的であるべきはずなのに、私的所有のもとにおいては非自由意志的であり、かつこの「分業」と「協働」によって生産力が高まる。しかしその生産力の高まりはますますこの「分業」を疎外化してゆき一方に「無産者」他方に「富と教養」とを産んでゆく。だがこの事実をもって「分業」そのものを否定してはならないだろう。かかる「分業」とそれにもとずく私的所有がなかったら共産主義は一地方的なものに限定されてしまっていたであろうし、かかる私的所有が又共産主義を世界史的交通の諸力を高めることにもなるのであるから。

以上のように論ぜられる「分業」概念は本来意識的な人間存在が、非意識的外化となり疎外化となっていることを論ずる点に於て「経・哲手稿」に於ける「疎外された労働」概念の延長であり、両者の間に方法論的断絶をみようとするのは正しくないであろう。

「経・哲手稿」と「ドイチェ・イデオロギー」との間の方法論的同一性は、その裏にあるマルクスの存在論的人間学が同一であることによる。さきに少壮ヘーゲル派に対するポレーミックとして記述された人間の類的存在のあり方をみた。だがなんといっても大部分エンゲルスの手になり、マルクス以上に実証的な彼の論述のあいだにこれ以上の記述は不可能であったと思はれる。単に技術的に不可能であったばかりでなく、そもそも類的存在を規定し記述することは本来的に不可能なはずである。そのことは次のような言辞にもうかがえるだろう。

「共産主義はわれわれにとっては、つくりださるべき一つの状態、現実が基準としなければならない一つの理想ではない。われわれが共産主義とよぶのは、いまの状態を廃棄するところの現実的な運動である。」(註19)

このE・ベルンシュタインばりの言辞[註20]も、あるべき状態としての類的存在について規定不可能から必然的に出てくる帰結であろう。

この類的存在がマルクスに於て①特定の歴史的社会的背景をもった概念であるのか。②あるいは非歴史的社会的な概念、つまり歴史意識なり、非論理的な直観なりをもって把握された存在論的概念にすぎないものなのか。これによって疎外論が「科学」Wissenschaft として成立するか否か。哲学的カテゴリーによる経済学的分析への移行が成功しているのかどうか、それとも一つの断絶として、後者による前者の克服として完成期のマルクスが出てくるのかどうか。と云った論争の岐点になってくる。

概略ではあるがマルクスの思想の前後関係をみることによって一つの見方を打ち出して来た。結論的に述べるなら初期マルクスの文献は常にヘーゲルに対する又少壮ヘーゲル派に対するポレーミックとしてものされて来た。従ってその時々に論述されている本来的人間存在、類的存在も現実の人間規定も常にB・バウワーの見解に対しての批判であり、フォイエルバッハの、あるいは又プルードンのそれに対する批判としてのものであった。ルカーチが云うように初期のヘーゲルは「疎外された労働」の分析を国民経済学の研究を通して得たものとするなら、[註21]ヘーゲルの理性はフランス革命と産業革命とによってもたらされた市民社会成立過程の歴史意識の産物である。その意味では初期のマルクスは、哲学的にはヘーゲルによって抽出された「疎外された労働」の否定的側面、歴史意識としてはヘーゲルが現実との「和解」の道を歩もうとすることに対する「拒否」の態度が種々のポレーミックの動因となったと云える。それは現実的には四三年から四五年にかけてのパリ在留によって得られた、最早避けられないところまできていた来たるべき四八年の二月革命に対する歴史意識である。

従って、「疎外された労働」の分析はきはめて歴史的社会的条件に限定されたもの（市民社会）であるが、その分

析の本来の主体となるべき類的存在はきはめて歴史意識に支えられた非歴史的なものであると云はざるを得ない。

とは云っても「経・哲手稿」と「ドイチエ・イデオロギー」との間に方法論的断絶を認めたり、[註22] 完成期のマルクスが初期のかかる非歴史的なものを清算してしまったとみるのは正しくないであろう。分業・協働・生産力・生産関係・交通形態といったカテゴリーはすべて人間の意識的・自由意志的力を離れてしまっていることに対する返還請求の分析であったはずである。

他方又、初期のマルクスにみられるこの歴史意識に支えられた非歴史的な要素をさして完成期のマルクスを含めての全体的否定も正しいものとは思はれない。この立場は背後に西欧的理念、それこそフランス革命と産業革命とによってもたらされた人間存在の肯定的側面、それによる「和解」の道を「拒否」の道に対比させたあきらかな価値意識が働いているからである。[註23]

ここで事実判断と価値判断の論争をとりあげるいとまはない。しかし「疎外された労働」の分析と人間存在のマルクスの規定とを単に事実判断と価値判断の統一としてみるのも安易にすぎるのではないだろうか。[註24] いずれの思想もそうであるように新しい思想は時代のポレーミックを通して生れてくる。その点ではマルクスも例外ではない。国民経済学が自然権の思想を背後に秘めていたように、[註25] ヘーゲルも市民社会の成立による（人間）理性の一切に対する包括を背後に秘めていた。マルクスはこれらとのポレーミックとして生れて来たのではあったが、人間存在のあり方については啓蒙思想の遺産をうけついでいる。あきらかに自然権思想といい。啓蒙思想といい、非歴史的なもの、非論理なものであることはあらそえない。

きはめて「科学」的 wissenschaftlich であるといはれる弁証法的唯物論の成立過程を問いつめてゆくことによって一つの規定しえないもの、あるいはすでに前提になっているものにつきあたった。次に問題とされねばならないの

は、歴史意識といい歴史的直観といい、この規定されないものが現代にもつ位置及び意味である。現代に於て手あかのつくほどありふれた「疎外」なる言葉が云はれるとき、疎外されない状態の人間存在とは何かと問はれて答えない場合、その疎外論は成立しないだろう。又「疎外」を論ずる場合、常に初期マルクスの文献解題で終る疎外論も哲学史的意義はあっても現代に於ける疎外論とはならないであろう。これまで「科学」的と云はれ経済学的分析を有力な武器として来たマルクス主義の背後にある歴史意識をといつめて来たのであるが、この歴史意識がその後どのように変転をとげるかによってマルクス主義内部でも多くの論争をもって来た。

十九世紀後半、E・ベルンシュタインによっておこされた修正主義論争も、(註26)上部構造論批判、弁証法批判、絶対窮乏化批判などの形をとってはいるが、結局は市民社会—資本主義が変質したかどうかをめぐる歴史意識が根底になっていた。常に歴史のダイナミズムを産み、又歴史のダイナミズムによって規定されるこの歴史意識の推移(註27)とそれによる疎外論。これがこれからの問題点として残されるであろう。

註1　註現在最も権威をもつアドラッキー編集になるMEGA版、Einleitung XIII によると、„Vorarbeiten zur Heiligen Familie“ in „Archiv K. Marksa; F. Engelsa“ Band III, Moskva 1927 p. 247-286 なるロシア語版があったそうであるが、我が国には入っていない。

註2　H・マルクーゼ「初期マルクス研究」良知力・池田優三訳三頁、未来社。

註3　Rugard Otto Gropp; Die marxistische dialektische Methode und ihr Gegensatz zur idealistischen Dialektik Hegels. Deutsche Zeitschrift für Philosophie. Hefte 1 und 2,Jahr II/1954 この論文はG・ルカーチのヘーゲル・ブッフ Der Junge Hegel und die Probleme der kapitalistischen Gesellschaft 1954 がベルリン・アウフバウ出版から再三出されることになったのに対する反駁としてものされたものである。論争点は「経・哲手稿」とヘーゲル「精神現象学」との間に、ルカーチが「疎外された労働」の概念を中心としてかなり連続的解釈を下したことについての反論であった。これ以後、独・仏・伊の各国から寄稿を得て Heft 5/1956 まで論争が続いたのであるが、編集長W・ハーリッヒの逮捕によって政治

的幕切れとなった。「ハーリッヒ事件」については「思想」一九六二年一月・三月号に報告されている。

註 4 G. Lukács; Der Junge Hegel und die Probleme der kapitalistischen Gesellschaft Berlin. Aufbau-Verlag. 1954. S. 694

註 5 前掲G・ルカーチのヘーゲル・ブッフ、仏ではH・ルフェーブル。

註 6 Heinrich Popitz; Der entfremdete Mensch. Hrsg. von Karl Jaspers. Verlag für Recht und Gesellschaft, Basel 1953 も多くの中の一例として参照。

註 7 Karl Marx/Friedrich Engels; Kleine Ökonomische Schriften 42 Bd. 1955, Dietz Verlag s 139.

註 8 Karl Marx/Friedrich Engels; Die Heilige Familie und andere philosophische Frühschriften, 41 Bd. Dietz Verlag S. 85.

註 9 ebenda S. 96.

註 10 G.W.F. Hegel; Sämtliche Werke Bd. 2. Phänomenologie des Geistes. Leipzig Meiner, 1937. S. 20.

註 11 Die Heilige Familie S. 78.

註 12 ebenda, S. 81.

註 13 ebenda, S. 80.

註 14 ebenda, S. 75.

註 15 K. Marx/F. Engels; Die deutsche Ideologie Dietz Verlag, 1953, S. 594.

註 16 Die Heilige Familie, s. 91.

註 17 Kleine Ökonomische Schriften, S. 105.

註 18 Die deutsche Ideologie, S. 30.

註 19 ebenda, S. 32.

註 20 Eduard Bernstein; Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie, Stuttgart, 1899, (Dietz Verlag, 1920), Schlußkapitel „Endziel und Bewegemg" S. 233 ff.
; Wie ist wissenschaftlicher Sozialismus maglich? Stuttgart, 1901.

註 21 G. Lukács; Der Junge Hegel, S. 227 f.

註 22 東独に於けるやきほどの Gropp の論文参照。

註23 Erich Fromm; Marx's Concept of Man, NeW York, 1961 などはその一例。

註24 「思想」一九六三年四月号、城塚登氏論文参照。

註25 A. Smith; The Wealth of Nations に於ける invisible hand の問題を考えてみよう。

註26 E・ベルンシュタインの問題提起を受けてK・カウッキー、R・ルクセンブルグなどが参加した諸論争は、資本主義が新たな段階に立ちいたったことに対する各人各様の反応の仕方を示したものであった。この論争については改めて論じてみたい。

註27 直接に歴史意識を問題にして論じたのはマルクス主義の中でみあたらないが、十九世紀末からのあの修正主義論争の一段落した後、G. Lukács; Geschichte und Klassenbewußtsein, Berlin, 1923 をめぐっておこるルカーチと第三インターとの論争はやはり歴史意識が問題になる一つのエポックであったといえる。